

第十二章 パリ

一 帰りの航空チケット

六月二日、パリに着いた。直ぐ小さいながらも清潔な宿に落ち着くことができた。宿の場所がどの辺りであったか分からないのが残念である。現時点での推測だが、アムステルダム方面からの国際列車は、「北駅」に着くことであるので、この北駅近くの宿を紹介してもらったのではと思われる。部屋から階段を一階へ下った直ぐところに朝食会場があり、こぎれいであつたこと、クロワッサンと思われるパンが出たとの記憶がある。

落ち着くと直ぐに帰りの航空便の確認を行うことにした。当時、日本国際学生連合（JISU）という組織が格安航空券販売などをしており、そこでチケットを買っていたので、そのパリ事務所を訪れた。日本で、六月七日、日本着の便を仮押さえしていたはずだ。事務所を訪ねると、運航計画が変更されているか何かの都合で、一週間遅れの六月十五日にしか飛行機に乗れないとのことであつた。困った。お金がかなり減ってきており、帰国が延びるとぎりぎりになつた。また、予定どおり帰れないとなると「帰りたい」との気持ちが湧いてきた。困ると伝えると、最終確定ではないのでまた来て欲しいと言われた。

しょうがない。再度、訪ねることにして、パリ市内を見て回ることにした。

二 ノートルダム大聖堂

パリでは、これまでの徒歩での名所巡りと異なり、地下鉄を利用した。歩いて回るにはパリは広すぎた。

路線図があったので、目的地に近い駅を地図で見つけ、そこまでのルートや乗り継ぎ駅を確認して何とか乗れた。地下通路が長かったの思い出がある。また、地下通路ではストリートミュージシャンが演奏していたとの記憶もある。

まずはノートルダム大聖堂（寺院）を訪ねた。ヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』（「ノートルダムの子守し男」）の舞台となった寺院である。小説をいつ頃読んだかは不確かだが、この小説の舞台というところで行きたかった場所である。塔の頂上まで登ることができ、期待どおり怪物などをかたどった彫刻も身近に見られ、その不気味さは迫力満点であった。写真からでもその迫力が分かる。

塔からは、パリ市内の三六〇度の眺望が見られ、遠くにはエッフェル塔が望めた。

この大聖堂については、二〇一九年の大火事のニュースが記憶に新しい。二〇二四年末までの修復完了を目指しているらしい。



パリ

1 ガーゴイルと呼ばれる。ガーゴイルはもともと、教会の壁面に突き出した形で取り付けられ雨どいの役割があり、建物が傷まないように、雨水を集めて離れた場所に放出しているとのこと。フランスエクスプレス、<https://www.france-ex.com/blog/item/12930.html>、2023年10月31日現在。

三 エッフェル塔と凱旋門

次にエッフェル塔を目指した。塔には登れるが料金が高かったので止めた。下から眺めるだけで十分であった。また、凱旋門へも行った。

この両者については、特別に感動したとの記憶がない。あまりにも名所を見過ぎてしまったというよりも、歴史的背景など知識がなかったことが理由と思われる。



ノートルダム



ノートルダムのガーゴイル

パリを舞台とした小説と言えば、私たちの世代で言えば、『ノートルダム²のせむし男』と同じくヴィクトル・ユーゴー作の『レ・ミゼラブル』であろうか？ 一八六二年の作とのことであるので、エッフェル塔はなかったが、凱旋門は完成していたはずである。苦難の連続のストーリーなので苦しくて読み切れていない。ノートルダム大聖堂のあるシテ島やリュクサンブール公園が出てくるらしいので、これもよく読んでいけば、パリの街をもつと感慨を持つて観られたと思う。ヘミングウェイの『日はまた昇る』でもパリの情景が出てくる。『移動祝祭日』は、パリの街と若い作家時代のヘミングウェイとその妻との暮し振りなどが主題だ。やはり、好きな小説を読んだり映画を鑑賞したりしていれば、当時のパリをもつと深く味わうことができたはずだ。これも残念であった。

旅も終わりに近づき、旅そのものよりも帰国の可否や帰国後の生活のことが気になってきたことも、パリの印象に影響したかも知れない。



エッフェル塔



エッフェル塔



凱旋門

四 ルーブル美術館は

ルーブル美術館は、ご承知のとおり広大で展示作品ものすごく多い。有名な作品のみは見逃すまいとした。私としては『モナリザ』と『ミロのビーナス』を見れば十分と思ったが、当然のことながら素晴らしい王冠などの展示もあった。また、古代エジプトの彫像などの展示も多くあった。当然ではあるが絵画のコレクションも膨大で、有名な作品が数多くあった。また行く機会があれば、事前に下調べを十分にした上で見学に臨まなければならぬ。

さすがに『モナリザ』の周りには人だかりがあつたが、『ミロのビーナス』の回りの人だかりはそこまでではなかつた。



古代エジプトの彫像



素晴らしい王冠



モナリザ



ミロのビーナス

五 モンマルトルの丘

モンマルトルの丘は、パリで最も標高が高い場所で、昔、多くの芸術家がこの周辺に集まったことでも知られている。丘の上には、サクレ・クール寺院があり、近くには、ムーランルージュもある。ムーランルージュは入りたかったが敷居が高そうであきらめた。モンマルトルの丘の上からの眺望は承知のとおり抜群であった。広場には、敷ものを広げただけのお土産屋がたくさんあった。そして、売っている人はアフリカ系と思われる黒人が多かった。

私は、記念に「顔を彫刻した金属性の首飾り（皮ひも付き）」を買った。値段は覚えていないが気に入っており、現在も金属の顔の部分キーホルダーとして使っている。

エッフェル塔やルーブル美術館よりも、こんな記憶の方が強い。



サクレ・クール寺院



モンマルトルの丘の上



金属製の首飾り



ムーランルージュ

六 ロダン美術館

『考える人』などで有名なロダンの作品などが展示されている「ロダン美術館」を訪れた。考える人のオリジナル作品はいくつもあるとのことであるが、ここに展示されている作品はオリジナル中のオリジナルと思われる。

『考える人』は一九七五年当時、日本では最も有名な彫刻作品の一つであったであろう。ロダンの言葉「都会は石の墓場です。人の住むところではありません」は、開口健の『フィッシュ・オン』で紹介されている。この言葉と『考える人』とは直接関係はないが、『考える人』の本物はぜひ観たいと思っていた。当時の若者の迷いを象徴している作品と想っていたのかも知れない。本物は観たが、特別な感情は湧いてこなかったと思う。当時、迷っていたし、自称、考えている人のつもりだったが、『ピエタ像』や『ダビデ像』の方が、印象が大きかった。

ただし、他にも、見事な彫刻、絵画がたくさんあり、十分楽しめた。



考える人



ロダン美術館にて

七 エスカルゴの晩餐

いよいよこの旅も終わりである。お金も少しは残っていたのでお祝いにちよっぴり良さそうなレストランに入り、夕食を取ることにした。少し、敷居が高そうな店だったが思いきって入った。店員がメニューを持ってきた。フランス語のメニューを見ながらなんとかエスカルゴを注文した。

給仕が「君はエスカルゴを知っているのか素晴らしい」とか言ったように思う。私は褒められたように受け止めて嬉しかった。他に何をオーダーしたかよく覚えていない。エスカルゴは特段に美味しかったとの記憶はないが、帰国できることを祝っての一人での晩餐であった。

そして、旅のことを振り返っていた。新たな可能性を探ってみたいとは思っていたが、帰国が遅れるかも知れないと聞いた時、正直帰りたいと思った。モラトリアムのための旅行はその目的を果たせたのだ。

トラブルのことも思い出していた。「ベニスへの国境越え」「アテネでの万引き疑惑」「モナコでのコンプレ事件」そして「アルジェでのトラブル」と「アムステルダムでのホモ事件」。なんとか乗り越えて、今、旅の終着の地に居り、一人だがお祝いをしている。もう一度言うが「目的を果たせたのだ」、そして無事であった。

ヨーロッパ、アルジェリアを巡った少し長い旅の終わりであった。

3 この時は、エスカルゴが特に美味しかったとの記憶はないが、帰国後かなり経過したのち、イタリア料理店でエスカルゴのつぼ焼きを何度か食べた。にんにくとバターの香りの方が強いと思うが美味しかった。エスカルゴは、フランス料理として有名だが、イタリア料理やスペイン料理でも出てくる。